「友好交流」「災害応援」守口市と協定を締結しました。

大阪府守口市と高島市は4月25日、「友好交流」と「災害時の相互応援に関する協定」に調印をし、両市民の友好関係をこれまで以上に推進していくと同時に、大規模災害が発生した場合には職員の派遣や必要物資の提供を行うなどお互いに応援しあうことに同意しました。

高島市にとっては、昨年9月に同様の協定を結んだ大阪府吹田市に続いて二つ目の自治体となります。

守口市役所で行われた調印式には、両市の関係者11人が出席し、海東市長と守口市の喜多洋三市長が、高島硯と雲平筆を使ってそれぞれの調印書に署名をしました。

大阪府守口市は、昭和55年、安曇川町長尾地先に「安曇川レクリエーションセンター」を開所したことがきっかけで、旧安曇川町と昭和56年に「友好提携宣言」を締結。また、平成8年には「災害時の相互応援に関する協定」を結んでいました。

今後も、これまでに築かれた交流や災害時の連携などをさらに発展・強化しながら、両市民の結びつきをより一層深めていきましょう。

●守口市のあらまし

大阪平野のほぼ中央、淀川の左岸にあり、南と西は大阪市、東は門真市、北は寝屋川市に接しています。人口は約14万9千人、面積は12・73㎢で、市内に松下・三洋の2大大手家電メーカーを擁し、家電工業を中心とした中小企業のまちでもあります。

また、守口市役所の近くには、中江藤樹先生を敬愛していた大塩平八郎の書院が今も残されています。

ようこそ高島市へ

鍛冶職人のまち イプジット村から村長らが訪問

鍛冶屋のまちとして有名なオーストリア・イプジット村から、4月28日、ヨーロッパ鍛冶界の第一人者といわれるアルフレッド・ハーバーマン氏(写真右)やヨーセフ・ホフマッハー村長（写真中央)をはじめ合計9人の方が高島市役所を訪問されました。

イプジット村は、首都ウィーンから西に約100㎞にある人口4,000人のまちで、2年に一度、鍛冶技術を競う世界大会が開催されているところです。

ハーバーマン氏は75歳。25年前にも一度来日されており、京都芸術大学の招きで再び来日し、4月15日から約1週間、マキノ町在住の鍛冶職人の工房で、アジアとヨーロッパの交流を表したモニュメントを制作されました。

モニュメントは高さ85センチ、幅45センチで、2枚の鉄板が羽のように並んで立ち、中央には日本と太陽と鍛冶にかかせない火を象徴する赤いガラスがはめ込まれています。

来日前から構想を練っておられたそうですが、ここに来て、高島の自然などにふれて初めて形を成したそうです。

高島市内では、マキノ町の北牧野に古代の製鉄遺跡が多く存在しており、当時、市の北部を治めていた地方豪族・角氏が製鉄と深いかかわりを持っていたことも知られ、かつてこの地に響いていたであろう槌音が、不思議な繋がりで遠く離れた地に住む人の手によって甦ったように感じられました。

イプジットのみなさんは、マキノ町海津の貸別荘「四季亭」で地元市民のみなさんとの交流会に参加され、高島市での有意義な時間を過ごされた後、帰国の途に就かれました。

（企画調整課）

市長日記

田んぼでは稲がぐんぐんと育ち、濃い緑が風にさわさわと揺れています。お茶碗一杯のご飯を食べるとオタマジャクシが35匹生きられる環境を守っていることになるとか。琵琶湖の水を飲む人や高島産のお米を食べる人と、共感と支えあいの環を結びあうよう努めます。

地域の方々がきれいに守ってきてくださったお陰で、マキノサニービーチ(高木浜から知内浜)が環境省の全国快水浴場百選に選ばれました。更に「湖の部」でただ一ヵ所「特選」の評価を得ました。問い合わせが急増しています。高島市では8番目の全国百選です。

先日、水中音の研究者と大学生が市内で録った音を聞かせてくださいました。今津港の桟橋から録った水中音の綺麗なこと。マキノの中ノ川や東小学校の前の川、鱒の養殖池。水の流れる音。気泡の弾ける音。鯉がハラビレで砂を掻く音や湧水が砂を転がす音など。そして「かばた・かわと」の音も家ごとに違いがありました。

また、「めだかの声」なる音やミジンコの出す音などを初めて聴きました。私たちは、人間の耳では聞き取れない音に包まれています。澄みきった感じとか、清らかな感じ等はきっと訳がある。きれいな水は高いきれいな音がし、汚れた水はくぐもった音になる。高島はきれいな音空間です。

さて、五月連休は好天に恵まれ、各地のお祭りも個性豊かに賑わい、今津スタジアムではOBC高島の地元デビュー3連戦が行われました。3日間とも500人を越える応援団が詰め掛け、高島発のドラマが始まったことを実感しました。

また、琵琶湖少年サッカー大会には選手だけで1000人。箱館山でのマウンテンバイクJ1大会は日本最大で選手1350人。ガリバーホールでの第11回琵琶湖国際フルートコンクールには218人が高島を舞台に最高のパフォーマンスを見せてくれました。フルートコンクールの審査委員長は、指使いの練習と共に、美しい音色を創ることの大切さを話されました。美しいと思う感性を磨く体験は何処でするのでしょう。

子どもの国、ガリバー旅行村だけでなく、ブナの原生林の中央分水嶺トレッキングでも高島は注目の的です。環境を活かし施設を活かし、観光振興経済特区と大いに協調して経済の環も結び育てていきましょう。

6月3日から4日にかけて第2回日本再発見塾が高島市で開催されます。日本を代表する達人達が、ボランティアで地元の達人さんと話に来られ、それを聞きに100人を越える参加者が。高島だから、あなただから、今だからこそ出来ることを探る。

6月はOBC高島のクラブ選手権試合(3(土)・4(日)今津スタジアム)に始まり、サッカーワールドカップの日本代表の応援と気合が入ります。「エールは人の為ならず」。夢に挑む若者達に熱い声援を。「オーレ!」

海東英和　拝

シリーズ 環の郷（わさと） 高島を目指して その六

春の小川に耳をすませば

去る5月14日、新旭町旭の「環の郷」交流研究センターにおいて、滋賀県立大学および京都精華大学が主催する同センター春の祭りが開催されました。今回のテーマは「春の小川」にスポットを当てて、川の音を聞き、自然の言葉から学ぶ方法について考えました。

全国の川の音風景を採録、研究しておられる元(社)建設電気技術協会の山崎久勝氏から、高島市内の川や湧き水の音を聞きながら、その特徴や、そこに見えてくる生活の様子を解説していただき、両大学の学生による現地調査の結果などの報告がありました。また、水の中でメダカが発する声を聞くなどのアトラクションも行われました。

広大な山林を有する高島市は、豊かな水の郷でもあります。多くの雪が降った今年は、山々からきれいな水がびわこに流れ込んでいます。私たちの身の回りにある川のせせらぎから、こうした自然の恵みを実感できます。水は生活に欠かせないものですが、私たちの生活様式の変化などから、身の回りの川や湖への関心が薄れてきているのも事実ではないでしょうか。

今回の研究発表は、身近な川の声から私たちの生活の様子を聞き取る機会となったことと思います。忙しい毎日をお過ごしの方も多いでしょうが、たまには水の湧き出す音にそっと耳をすましてみてはいかがでしょうか。子どもをあやす玩具のようなカランコロンという音に心を癒されるのではないでしょうか。これもとっておきの"高島ならでは"です。

次回は8月に「夏のまつり」を予定しています。「竹」の文化にスポットを当てたイベントを予定しています。